

許堯佐とその小説

内山知也

一 ま え が き
二 許堯佐の生涯と文學

三 「柳氏傳」について

(a) 詩物語としての特色について
(b) 浪漫性について

(c) 評論文にあらわれる人間観について
(d) 文體について

四 む す び

一 ま え が き

「章臺柳」の詞にまつわる美しい物語「柳氏傳」の著者、許堯佐の生涯は、多くの唐代小説の作者と同じように、歴史の深い霧に被われて、現在ではほとんど知ることができない。彼や、彼の兄康佐の詩文集についても、「新唐書」新唐書藝文志には記載がないから、宋初のころには、すでに彼らの文章は散佚してしまっていたのである。しかし、幸なことに、「柳氏傳」は、「太平廣記」卷四八五に收められたことによつて、今にその姿を伝え、多くの文學史家の紹介をえた。一九五五年、李長之は、「柳氏傳」を、志怪の餘波を受けた作品などから

一步進んで、完全な傳奇文學となつた最初の作品であり、すぐれた傳奇性を持ち、ひきしまつていて、と高く評價している。

私は、少ない限られた資料からではあるが、許堯佐の生涯を考察し、「柳氏傳」の文學的價值について論じたい。

二 許堯佐の生涯と文學

「新唐書」卷二〇〇儒學列傳下の許康佐傳によると、堯佐は、他の兄弟や、兄康佐よりも先に進士に合格し、宏辭科に擧げられ、太子校書郎になつた（その後八年目に康佐は制科に合格した）。やがて堯佐は、諫議大夫になつた、といわれる。また「舊唐書」儒學傳には、父の名を審と傳えている。

堯佐が進士に合格したのはいつのことであるか、徐松の「登科記考」などによつても明らかにすることはできない。ただ、制科に合格したのは、「唐會要」卷七六によると、徳宗の貞元十年（七九四）十二月で、科の名は賢良方正能直言極諫科であつて、裴度・崔羣・皇甫鏘ら中唐の官界に大きな足跡をのこした人材と同年であることが明らかになつてゐる。「新唐書」許康佐傳と「唐會要」とでは、科名に違いがある。また同年の詳明政術可以理人科の合格者に、「李章武

傳」の作者李景亮がいる。

徐松の「登科記考」卷一三によると、徐松は、權徳輿の「送許協律判官赴西川序」をひき、この許協律判官が許堯佐であると断定している。もしそうだとすれば、堯佐は、十年に太子校書となり、まもなく蜀の地に遊んで彭城公の従事となった。十三年一たん長安に歸り、再び正月元日に西川に歸つたことが、その文中より推定することができる。そして、そのころは協律郎に任ぜられていたことも想像される。

太子校書郎の官は、おそらく、前にもふれたように、堯佐の官界へのスタートとして與えられた職であろう。太子校書郎というのは、東宮官に屬する校書のことであろうと思われる。「新唐書」卷四九上上官志の東宮官の項には、「校書四人、正九品下。正字一人、從九品上。經史を校刊することを掌る」とあって、それは、定員四名、經史のテクストの校正係である。當時の皇太子は、徳宗の長子誦、のちの順宗であつて、貞元十年のころは三十六才であつた。順宗は「新唐書」卷七順宗本紀によると、「人となり寛仁にして、學藝を善び、隸書を善くす。師傳を禮重して、見ゆればすなはち先んじて拜したまふ」と、學問を尊重する皇太子であつた。

計有功の「唐詩紀事」卷四一には、

堯佐、貞元十六年燉煌の張宗本、滎陽の鄭權とみな征西府に佐たり。

と記す。計有功の典據は明らかにしえないが、「征西府」とは、おそらく西川節度使の據點成都をいうものであろう。貞元中期以降、永貞元年(八〇五)まで、吐蕃の攻略でもっとも成果をあげていたのは、西川節度使韋臯である。韋臯の幕府には、大曆十才子の一人司空曙も仕えていたのであつた。

堯佐はこののち、諫議大夫に立身した。藩鎮の幕僚からこの官にたどりつくまでには、相當の長い歳月を要したであろう。諫議大夫の官は、「新唐書」百官志によれば、門下省に左諫議大夫、尙書省に右諫議大夫がそれぞれ四名の定員で置かれていた。「左諫議大夫四人、正四品下。得失を諫論し、待從して相を賛ぐることを掌る。」堯佐がどちらの諫議大夫であつたか明らかでないが、帝の側近の一員であり、宰相の施政を援護する立場にあるこの職は、宰相の氣にもいり、かつすぐれた人材であることを必要とした。例えば、元和十二年十一月、寒人の張宿が、憲宗の特別の愛寵によつて、比部郎中から諫議大夫に昇任されようとしたとき、張宿の人がらを嫌惡した時の宰相崔羣と王涯の奏上したことば、

諫議大夫は、前時にもまた山林より抜くことあり。然れども、卑位より起りし者は、その例すなはち少く、用ふるもみな由あり。或は、道徳章明にて、聞達を求めず。或は、材行卓異にて、等倫より出づる。此を以て選求して、實に公議に愜る。その或は事跡のいまだ著はれざる、恩一時によりて、超升するに例ありといへども、みな時論ときろん允すにあらす。

は、寒門の出身で、進士科を經ない張宿の採用に強く反對したことはである。このように、諫議大夫は、帝の側近として、國政の方向を決定する有力な地位であつたから、宰相は、自分の腹心をその地位に置こうと努めたのである。諫議大夫としての堯佐の業績は、一つとして記録に残らない。また彼がいつごろその職にあつたのかもわからない。

正史その他の資料に残る堯佐の傳記は右にとどまる。堯佐の家柄については、彼の兄康佐の傳に、

許康佐は、貞元中、進士・宏辭に擧げられ、連いてこれに中る。家はなほだ貧しく、母老いたり。求めて知院官となる。人、その祿を擇ばざるを譏る。母の喪のすでは除するにおよび、およそ辟命にはみな答へず。人、すなはち、その親のために屈せるを知る。これより名あり。

と、彼らの家庭が貧しく、兄の康佐は、老いた母や、あるいは弟たちを養なうために、自から求めて、人の卑しむ知院官になつたことを傳えている。知院官とは、代宗のころ、劉晏が財政を掌つたさい、地方の豊凶の模様を、旬月ごとに報告させるため、諸道に置いた官である。おそらく、彼らは、貧しく身分の低い地方官の出身であつたのだらう。

また、康佐は、柳公綽に認められ、侍御史(從七品)から中書舍人(正五品)、翰林侍講學士となり、文宗の寵が深かつた。「唐語林」卷六に收められる逸話や、康佐傳によると、彼は春秋の學に通じていて、文宗に「春秋列國經傳」六十卷をたてまつつたが、それを讀んでいた文宗に、「關、吳子餘祭を殺す」の條について、「關とはだれのことか」と質問を受ける。康佐は、もしうっかり宦官と答へたら、當時權勢の甚かつた宦官に危害を加えられるであらうことをおそれ、「春秋の義奥うかくして、臣の窮究いまだ精しからず。あへて遽やかに解かず」とごまかして即答を避けた。文宗は笑い出したまま、その場は終りになつたが、のちに李訓は、それが宦官を意味することを説明し、帝に宦官の罪惡を強調して、ついに甘露の變に突入していったといふ。

康佐が春秋の學に通じていたことは、「新唐書」藝文志上に、許康佐等「集左氏傳」三十卷、一に文宗の御集に作る。

とあることによつても明らかである。文宗の侍講として、側近にありながら、朋黨の争いにもまきこまれず、宦官の毒手にもかからず、身を保ちえた康佐は、歴史への深い洞察と、慎重な保身の術を心得た苦勞人であつたようである。その他にも、許康佐「九鼎記」四卷の名が藝文志にみえるが、どのような内容か、今うかがうことはできない。

堯佐はどのような學問を得意としたのだろうか。諸兄弟よりも先に、進士や制科を経て、太子校書に任ぜられた經歷や、「文苑英華」や「全唐文」卷六三三に收められている彼の賦「五經閣賦」「清濟貫濁河賦」「堯堯相須賦」「日載中賦」の、經史の典故をふまえた諷諫の氣分をみると、兄康佐のように、經史の學にも秀でていたことが想像される。

堯佐の「五經閣賦」は、皇帝が儒官に命じて群書を集め、重閣を建ててこれを藏したことを賦している。

王者の邦を爲むるは、實に學校を先にす。載籍あらずんば、何をもちて教を垂れん。必ずや文字によりて忠孝を知らしむ。東序西序は、遊焉息焉に取り、八索九邱は、其をしてこれ則りこれ倣はしむ。ああ、我が后は聖哲なる者なるかな。儒官に命じて、至公もつて居り、崇ぶ所はこれ學、寶とする所はこれ書。群言を搜してここに在らしめ、重閣を立てて、もつてこれを藏せしむ。
(中略)この閣の岩巖たるを觀、吾が道の宏益なるを諒らかにせり。

堯佐は、この賦で、圖書の蒐集を學問盛行の基盤として、この業績をたたえている。

この賦は、いつ作られたのか明らかでないが、かりに、安祿山の亂

によって散佚した宮廷の書物を、元載が千錢をもって一卷を購ひ、また、拾遺苗發らに命じて、江淮の地方に書を探させたことがらを賦したとすれば、あまりにも早すぎる。おそらく、玄宗の時、侍講鄭覃の進言によって、大搜探が行なわれ、玄宗以來始めて四庫の書物が完備し、それを十二庫に分蔵したことがらに關連するものと思われる。

「清濟貫濁河賦」は、清澄な濟水が、その上流で、黃濁した黄河を貫通して流れていることを賦しつつ、濁りに交わっても染まらず、常に正しい道を守つて變らない士人のありかたを諷しているように思われる。その中で、

いやしくも光を和するものと、致を殊にす。なんぞ泥を滯すものと、別なからんや。

と、一種の積極的な清潔さを強調しているのは、彼の正義感のあらわれであろう。

「壘篋相須賦」は、壘と篋の唱和を述べながら、君臣の調和の必要性を賦す。

樂にしてすなはち既にしかり。臣もまたよろしく然るべし。壘の篋を得る、すなはち輔あるを期し、臣の主に奉ずる、必ず偏なきを致さば、倡和の功備はり、獻替の道存せん。

と、君臣の協力を主張する心は、「爾が韻、まさに舒ぶれば、我はすなはちこれを厲ますに疾を以てし、我が言これ濁らば、爾必ずこれを懲らすに清或り。」といった、しらべの積極的調和の精神から導き出されている。

「日載中賦」は、漢の文帝の時、新垣平が西に傾いた太陽が再び天に中したと祥瑞を奏して、年號を改めたことがあったこと、および魯陽公が韓と戦つて、戦いたけなわのとき沈もうとする日を戈でさしま

ねいて、三舍もかえしたという故事をひいて、太陽の祥瑞について賦している。「文苑英華」卷五には、この賦のあとに關構の「日載中賦」二篇を載せている。

堯佐は、何らかの形で、當時の僧侶とも關係をもつたようである。貞元十二年(七九六)八月十四日に死去した、廬山東林寺の熙怡大師の碑文と銘を書いている。その文によれば、熙怡は顏真卿・趙憬・盧群らの參禪の師であり、當時吏部侍郎であつた楊於陵も師事したことのある高僧であつたという。楊於陵が吏部侍郎であつた時といへば、元和三年(八〇八)から元和五年(八一〇)のころであるからこの文章は、この間に書かれたことになる。その他「祭律師碑銘」という作品があるが、いつごろのものか、また祭律師という僧も明らかにすることはできない。

「文苑英華」卷一八九には、堯佐の「石季倫金谷園」と題する五言詩を收める。荒廢した石崇の金谷園の遺蹟で、歡樂を極めた往事のロマンスをしのび、哀傷にふけるというテーマであつて、英華はさらに、李君房の同題の詩を付す。

このように、堯佐の作品は少なく、製作年代をきめることもむづかしい。これらの作品から與えられる漠然たるイメージは、學問の獎勵を國家の重要な政策と考え、君臣の調和を主張し、貞潔な志操を堅持しようとする人物、それでいて、懐古的なロマンチストといった、堯佐の姿である。この隔靴搔痒のうらみを救つて、小説「柳氏傳」がある。彼はそこに、一つの浪漫的な事件をとりあげて、彼の人間觀を展開している。そこではじめて、貞元、元和、あるいは長慶、太和と生きたらしい作者の、熱情的な一時期に、われわれはじかに觸れることができるのである。

三 「柳氏傳」について

「太平廣記」卷四八五雜傳記二に收められる、堯佐の小説「柳氏傳」は、才子佳人の贈答詩を中心として組み立てられた、浪漫的な物語である。「柳氏傳」の注意すべき特色は次の三つであるように思われる。第一は、二首の贈答詩を中心として形作られている、いわば詩物語ともいふべき物語構成。第二は、登場人物が現實的であり、徹底して浪漫的傾向をもつこと。第三は、小説の末尾に付けられている評論文に表現されている作者の人間觀である。私はこの三點を中心にして、この小説の文學性を論じた。

(a) 詩物語としての特色について

「柳氏傳」は詩物語である。わが國の「伊勢物語」が、和歌を中心とする物語であるように、この物語は、一般に「章臺柳」「楊柳枝」とよばれる詞を中心にして、その詞が歌われた動機と、その結末について物語るといった様式で、述べられている。

一つの樂曲や、詩の成立について、浪漫的なエピソードを傳えているものは、唐末の孟榮の「本事詩」や、同じく段安節の「樂府雜錄」に幾つも見出すことができる。これらの中でも、「章臺柳」「楊柳枝」の詞は、「長命女」の樂曲と同様に、最も感傷的なエピソードで飾られている。

「章臺柳」の詞は、33/7(韻)/7/7(韻)の字數構成をもつ作品である。それは、離別の悲哀をうたうことを主題とするが、同じく別離をテーマとし、柳を名にもつ唐代の樂府題の詩、「折楊柳」「楊柳枝」「楊柳枝詞」などの七言絶句に類したものは異つて、むしろ劉

禹錫の「瀟湘神」の起句に似て、その起句を章臺柳の三字でくり返しをする。また「楊柳枝」の詞の方は、李白の「桂殿秋」の起句「河漢女 玉鍊顏」のように上下の三字が主述の關係をもち、起・承・結句に韻をふむ。

「章臺柳」「楊柳枝」の詞がはたして韓翃と、柳氏の作であるかどうか、ほほ疑いがないとしても、確證があるわけではない。

「本事詩」情感第一には、「柳氏傳」とほとんど同一の物語を傳えているのであるが、その文末の著者のことばに、

開成中、余梧州を罷めたり。大梁の夙將の趙唯なるありて、嶺外の刺史となり、年まさに九十ならずとす。耳目衰へず、梧州を過りて、大梁の往事を言ふ。これを述べれば聴くべく、これみなこれを目撃せりと云ふ。故に因みにここに録せしなり。

という一文があつて、晩唐の開成年間(八三六—八四〇)に、九十歳に近い老刺史趙唯なるものが、かつて直接、この事件を目撃しており、それを孟榮に語り聞かせた、と述べている。後にもふれるが、「章臺柳」と「楊柳枝」の詞が贈答されるのは、物語の内容から考へて、ほぼ至徳二年(七五七)のことであるから、趙唯はこの詞がたしかに交換されたという證人になるには若すぎる。趙唯の「目撃した」という事件は、柳氏が、許俊の手によつて、蕃將沙吒利のもとから奪回されて、再會することができたことがらを指すものと考えられる。その事件は、ほぼ永泰元年(七六五)のころであろうと考えられるから、趙唯はおよそ十九歳あまりとなり、青年軍人の心に、強烈なイメージとしてそのときの感動的な光景が焼きつけられていたことになる。ともあれ、韓翃のような有名な詩人には、その在世中から、さまざまな浪漫的な傳説がつきまといつていたことが想像される。

「柳氏傳」のストーリーによれば、「章臺柳」は韓翃の作、「楊柳枝」は柳氏の作である。

章臺柳 章臺の柳、章臺の柳

昔日青青今在否 昔日青青たりしも今在りや否や

縱使長條似舊垂 たとひ長き條の舊のごとく垂るとも

亦應攀折他人手 またまさに他人の手に攀折せられたるべし

楊柳枝 芳菲節 楊柳の枝 芳菲の節

所恨年年贈離別 恨むところは年年離別に贈らるること

一葉隨風忽報秋 一葉風に隨ひたちまち秋を報じなば

縱使君來豈堪折 たとひ君來るともあに折るに堪へんや。

この詩は、楊柳を題名とする當時の詩の一般的性格に従って、相思別離をテーマとしている。しかも、その慕情は、長安の遊女と、遊里に耽溺したうかれ男との別離に漂うものである。前者は、かつてその愛を獨占して、今は遠く隔ってしまった、長安の遊女への思慕を歌いこめている。それに對する後者は、日ごとにかわる嫖客との別れを惜みつつ、空しい歳月を送るうちに、かつての思い出深い客の訪れを待ちのぞみ、はかない身の上と、移ろいやすい容色の衰えを嘆いていゝ。前者のテーマに對する姿勢は、劉禹錫の「楊柳枝」——春江一曲柳千條／三十年前舊板橋／曾與美人橋上別／恨無消息到如今——の、あの回想的傾向と同一である。それは、今眼前に涙して袂を別っているのではない。現實に一定の距離を置いて、にじみ出る感傷に身をよせているのである。また、後者も同様である。遊女の身のはかない定めを訴え、男の無情をなじる氣持を象徴化した、うたのあそびである。

おそらく、この二首の唱和の詞と稱せられているものは、本來遊里などで歌われ、流行したものである。のちに韓翃と柳氏の再會の事件が喧傳されるようになり、その事件の起源を語るために、この詞がストーリーの中心に登場してきたものだろうと私は思う。

獨立した詩として鑑賞するときは、他に類似したテーマの作品と比較して、必ずしもすぐれたできばえとは言えないこの詩が、物語の中に組みこまれると、現實性が與えられ、切實ないきいきとした雰圍氣をたたえてくるのは驚くべきである。堯佐の筆力の冴えと、物語構成の巧みさがそうさせるのである。

(b) 浪漫性について

「柳氏傳」は浪漫的な物語である。韓翃の纏っている周邊が、そういう物語の傾向に、なかばを貸しているとも言えよう。

ここに、韓翃の詩に對する、唐の高仲武の稱揚のことが引こう。高仲武は、至徳より大曆年間の詩人の詩を選んで、「中興間氣集」を編んだ人である。

韓員外翃は詩匠なり。意は史に近く、興致繁富なり。一篇一詠、朝士これを珍とす。「星河秋一雁 砧杵夜千家」また「客衣簡布潤ひ 山舍荔枝繁し」また「疏簾は雪を看るに捲き 深戸は花を映じて關す」は、これを前代に方ふるに、芙蓉水を出づ（とすも）いまだ多となすにたらず。

これを見ても、當時の名聲をうかがうことができる。また、元の辛文房の「唐才子傳」卷四にも、當時の詩人と比較しつつ、

比諷は文房（劉長卿の字）より深く、筋節は茂政（皇甫冉の字）より成る。當時盛にこれを稱す。

と述べている。韓翃に對する評價は、今日のそれよりもはるかに高かつたのである。

一方、韓翃を包む大曆の文學的傾向はどうだったのだろうか。宋の王謙は、この時代について、はなはだ興味深いことばを遺している。

大抵、天寶の風俗は黨を尙び、大曆の風は浮を尙び、貞元の風は蕩を尙び、元和の風は怪を尙ぶなり。

王謙は、盛唐末期から中唐に至る約百年を、代表的な四つの時代によつて、象徴的にその變化の特色をとらえている。

大曆——韓翃もその一員として數えられる大曆十才子の活躍した——時代に與えられた、「浮」ということばは、輕薄、熱中、浮艶などの意味を含んで、一種の浪漫的熱狂性を象徴しているように思われる。安祿山の亂以後の頹廢と混亂の時代にふさわしい定義である。安定にほど遠いあせりは、次の貞元の「蕩」、すなわち、耽溺、頹唐、放縱のデカダンスな氣分に流れこんでゆく。韓翃はその前の時代に生きたのであり、許堯佐はまた、それにひきついで、次の「怪」、異常なもの、意外なもの、珍奇なものを愛する時代に活躍したのであつた。

「章臺柳」「楊柳枝」の詞の、輕やかで艶めいた感傷と、「柳氏傳」の熱狂的な浪漫性は、この大曆貞元の氣風を傳えるものであろうと、私は思う。そしてまた、大曆十才子の一人韓翃は、その雰圍氣を身邊に漂わせる最適の人物であつたのであろうと思われる。

次に私は、「柳氏傳」の文章の特色をはつきりさせるために、「本事詩」に載せられた物語と比較しながら、進めていこうと思ふ。

「柳氏傳」の物語は、天寶年間に始まる。主人公・昌黎の韓翃は詩人として名聲がありながら、性格は落拓、貧窮の生活をしていて、と

堯佐は書き出す。これは「本事詩」の作者が、主人公を「孤貞靜默にして、ともに遊ぶところは、みな當時の名士なり。しかれども華門主寶、室はただ四壁のみ」と、おだやかで孤獨な、貧しい紳士として描いているのと趣を異にする。堯佐の好みは、輕薄な情熱的詩人にあることを、この冒頭の一文は明らかにしている。

ここに、李生という富豪がいて、愛妾に絶世の美人柳氏をもつていた。翃の名聲を知つて、翃を彼女の別宅の一棟に住ませ、すでに翃に好意を抱き始めた柳氏の心を察して、惜しげもなく柳氏を翃に與え、三十萬の錢を與えて生活の資とする。「本事詩」の作者は、柳氏の方から直接李生に「韓秀才の窮はなはだし。しかれども、ともに遊ぶところは、必ず名の聞えし人。これ必ず久しくは貧賤ならざらん。よろしくこれに假借すべし。」と働きかけさせるが、堯佐の柳氏は、ひそかに彼女の從者に、「韓夫子は、あに長く貧賤なるものならんや。」ともらして、深い尊敬と思慕の情をあらわす。堯佐の柳氏は、いかにもひかえめでいて、内部に激しい情熱をこめた女であり、後に亂世にあい、長い別離の悲嘆に耐え、貞節を守ろうとする、しんの強い女性として描かれようとしている。

貧しい詩人と、富豪の愛妾のちぎりは、理解あるパトロンのほからいによつて結ばれる。當時の文人は、しばしば、地方の藩鎮の幕府に身を寄せたり、高官の被護をうけていた。大曆十才子を例にとると、李端は、昇平公主を娶つた郭曖のサロンに集まつた一人だし、盧綸は元載に、司空曙は韋卓に愛されていた。のちには、そうしたサロンの中で小説が書かれたことさえあつた。

堯佐は、二人の結縁を語つたあとで、

翃は柳氏の色を仰ぎ、柳氏は翃の才を慕む、兩情みな獲られ、

喜び知るべきなり。

と述べる。そこでは、男は女の美貌を、女は男の才能を、それぞれ愛のもつとも根源的なものとしてひかれてゆく。そして双方とも、かっきりと相手の胸に想いを焼きつけることをもって、愛の最高のありかたであると考ええる。しかも最後には、「どんなにかうれしかったことであろう」(前野直彬氏「唐代傳奇集」Iの譯文による)と、ぬげぬげ彼自身の本心を言い切っているではないか。こんな結ばれかたが、大曆貞元時代の戀愛理想像の一つであったのであり、堯佐の戀愛觀でもあったと考えられる。

物語を進めよう。韓翊は翌年試験官禮部侍郎楊度のもとに進士科に合格し、やがて柳氏を長安にのこして、清池(河北省滄縣か)に歸省する。天寶十四年(七五五)安祿山の亂が起り、韓翊は平盧節度使侯希逸の幕府に招かれて、書記となった。

平盧節度使侯希逸は、營州(熱河省朝陽縣)の人、身のたけ七尺。天寶の末には州の裨將として保定城を守る軍人であったが、安祿山の亂が起り、節度使王玄志が死ぬと、高麗人李正己に推されて平盧節度使となった。彼の母は李正己のおばで高麗人だったのである。范陽(河北省涿縣)を攻撃していた希逸は、奚族の侵攻をうけ、二萬の軍を率いて、海を渡って南下し、青州(山東省益都縣)に入った。青州を根據として平盧淄青節度とその幕府の名は改められたが、そこに韓翊は仕えたのである。

物語は、反亂軍が長安から追い出されたとき、つまり、至徳二年(七五七)九月、郭子儀が回紇・沙陀の援兵によって長安を恢復した年に飛躍する。韓翊は、練絹の袋に砂金をつめ、「草臺柳」の詞をつけ使者に持たせ、長安に柳氏を捜させた。柳氏は尼となって法靈寺に

かくれていたが、この詞を見て、「楊柳枝」の詞をかえす。この詩の贈答は二人の別離後三年以上の後であった。

物語は、さらに少しの時を進めて、柳氏は蕃將沙吒利に劫掠され、その邸宅の中で籠を受ける身となる。沙吒利とはおそらく沙陀族の酋長骨咄支をモデルとするものであろう。安祿山攻撃の先鋒となつて功を立てた骨咄支には、柳氏を奪うくらいは何ほどのことはなかったのである。

さて、侯希逸は左僕射に任ぜられて長安に上ることになり、翊も從つて都に歸つた。しかし、すでに柳氏の姿はなかった。翊は彼女を戀い、歎息してやまなかつた。

侯希逸が長安に入ったのは、おそらく永泰元年(七六五)のころであらう。「資治通鑑」卷二二三によれば、希逸の「游畋を好み、塔寺を營み、軍州これに苦し」んだ失政のために、部下の李懷玉がクーデターを起し、彼を追放したのである。しかしこのころ、失敗を許されて長安に入り、檢校尚書右僕射知省事となり、大曆末に淮陽郡王、建中二年(七八二)には司空にと、幸運な晩年を送るのであるが、長安に歸つたときは、敗殘者であり、韓翊もまた失意の人であったのである。

韓翊と柳氏は、ある日偶然にも龍首崗でめぐりあつた。龍首崗は、王維の「登樓歌」に「卻瞻兮龍首／前瞻兮宜春／王畿鬱兮千里、山河壯兮咸秦」と歌われた、長安西部の丘陵で、城内に六坡といわれる六つの低いうねりをもつて入りこんでいた。柳氏は下男に簾をおろしたまだら牛の牛車をひかせ、女奴二人をつれていた。車の中から、翊を呼びとめ、身のいきさつを女奴に告げさせ、明朝道政里の門に待ち合わせることを、ひそかに約束する。翌日、韓翊が待っていると、柳氏は、白い薄絹に香膏をつめた玉の盒子を車から手渡し、「當遂永訣、

願實誠念」とだけ言つて別れてゆく。別れの場面は、四字句を中心とする簡潔かつ鮮明な文章で、詩的に描かれる。

乃回車、以手揮之、輕袖搖搖、香車麟麟、目斷意迷、失於驚塵、翊大不勝情。

——さういふと、車を返して、手を振った。ひらひらと揺れる輕い袖、ぎしぎしと進むあえかな車、目も見えず心もくらむ中を、舞ひ上る埃に紛れてしまった。翊はつくづくとやる瀧ない心地がした。(吉川幸次郎氏「唐宋傳奇集」の譯文による)

この忽率の別れの「目斷意迷、失於驚塵」は、翊の位置からの光景でありながら、また同時に柳氏から遠ざかりゆく翊の姿でもあった。

「本事詩」では、翊が中書省に行こうとして、子城の東南隅で牛車に遇い、後をつけてゆくと、車中から柳氏の聲がかかり、塵をひらいて柳氏が直接翊に身の上を語る事になっている。文章の迫力は「柳氏傳」に比べて、はるかにとぼしい。

道政坊における悲痛な邂逅と別離は、最初に二人が結ばれた天寶末から、すでに十年餘の歲月を經ているはずである。柳氏の詞の「一葉隨風忽報秋／縱使君來豈堪折」はこのむなししい再會を豫言した伏線であったが、才子佳人の想いは、長い歲月の障壁をこえて、いよいよ深く激しく昂まってゆくのであった。

こうして、物語は最後の邂逅の場面に入る。

ちようど滯青の將校たちが、酒樓で宴を催していた席上、うちひしがれた韓翊を、虞侯(藩鎮の將校)の許俊が見とがめ、事情を聞いて感激し、自から柳氏をつれもどしてこようと申し出る。許俊は翊に柳氏あての手紙を書かせて、それを携え、一騎を従えて沙吒利の出かけたすきを見はからって邸宅に押し入り、「將軍は突然發病、夫人を召し

ておられる」と叫びながら柳氏の室に入り、柳氏をかかえて、一同の待つ酒樓にもどってくる。こうして、韓翊と柳氏は再び結ばれる。堯佐は「柳氏、翊と手を執りて涕泣す。」と書いて、感激的な場面を傳えている。

この冒険の後始末について、物語はさらに語りつぐ。翊と許俊は、後の禍をおそれて、希逸に申し出る。希逸は、

吾平生所爲事、俊乃能爾乎。

——俺が平生し出かしさうなことだが、俊めよくもやりをつた。

(吉川幸次郎氏「唐宋傳奇集」の譯文による)

と驚く。才子佳人の戀を遂げさせるために、危険を侵した豪俠の行動を、身にひきかえて痛快がっている、軍人出身の大官の大らかな高言である。時さえあれば、希逸も蕃族の大將に一あわふかしてやりたいと思つていたのである。

希逸は天子に上書して、沙吒利を彈劾し、許俊の義俠心を稱揚する。しかし、帝は沙吒利を罰することもなく、錢二百萬を與え、柳氏を翊に歸させた。翊はのちに中書舍人に累遷した。こう述べて物語は終る。

「本事詩」によると、この後、翊は十年の浪々生活を経て、宣武軍節度使李勉に仕えた。すでに老境に入つていた彼は、同輩に理解されず、むしろ輕視されさへしたが、ようやく徳宗の建中の初め、召されて駕部郎中知制誥となり、中書舍人に及んで生涯を閉じたといわれる。

以上ストーリーを追つて、少しでも描寫について述べてきた。堯佐の文章は極めて簡潔である。しかし別離と、邂逅の場面には描寫を細かくして感動をもちあげ、かつ、長い年月にわたる事件を、

手ぎわよくまとめあげている。

「柳氏傳」は右に述べたように、非現實的な要素を含まない。「離魂記」「枕中記」「任氏傳」「李章武傳」など、少なくとも貞元末期までには作られたこれらの小説の、非現實的志怪臭を、「柳氏傳」はみごとに脱ぎ棄てている。そして「霍小玉傳」「李娃傳」「鶯鶯傳」のような、愛情の離合集散をモチーフとする本格的な傳奇小説の、小型なモデルになっているかみえる。

「柳氏傳」は翊の身の上から書き始められる。翊の動きを中心にし、柳氏はそれに陰微にかかわりながら、要所で緊密に交わる。彼らの別離は、彼らの邂逅の伏線である。だから、別離の悲哀は再會の歡喜のために、一そう強調されなくてはならない。彼らの再會は、第一回は偶然の手ではかなく、第二回は豪俠の義俠心によってしつかり行なわれる。この物語は、最後の邂逅がなければ成立しえないのである。

最後の邂逅の場面では、主人公は許俊にすり替ってしまっていて、ここから物語の調子が変わり変ってくる。悲痛の感傷が、激烈なスリルと感動にすりかえられ、筆者の意圖が露骨に現われ始める。

(c) 評論文にあらわれる人間観について

物語の末尾に付けられた評論文には、登場人物に対する堯佐の評價が掲げられている。とりあげられた人は、柳氏と許俊である。韓翊が忘れられているのは、堯佐が韓翊の立場——知識人、官人としての——にそっくり立っているからである。

堯佐がもっとも力をこめて描きかつ論じたかったのは、柳氏と許俊である。

然ればすなはち、柳氏は防閑を志しつつも、克^たはざりしもの、許俊は感激を慕ひつつも、達せる者ならざりしなり。かりに、柳氏色をもって選ばれしならば、すなはち、熊に當り、輦を辭せし誠も繼ぐべく、許俊才をもって擧げられしならば、すなはち、曹柯澗池の功も建つべかりしに。

さらに堯佐は續ける。
それ、事は跡によりて彰はれ、功は事を待ちて立つなり。惜しむらくは、鬱堙して不偶なりしことと、義勇いたずらに激せしことと、みな正なるものに入らざりしことなり。これあに變の正なるか。けだし遇ふ所然らしめしなり。

堯佐は、柳氏が沙吒利に奪われたことを遺憾とし、柳氏がうずもれて終ったことを悲しむ。熊に素手で立ち向って、漢の元帝の危急を救った馮婕好。彼女は勇氣によって帝の愛を得た女である。成帝と輦に乗ることを、道にかなわなないこととして、強く辭退した班婕好は、潔癖な貞淑さと、才智によって愛を得た女である。しかし、柳氏は帝の寵を受けるどころか、蕃族の將軍に操を奪われた。柳氏の美貌と才智は、それに十分な資格をもちながら、彼女のいたましい「境遇」は、彼女に「鬱堙不偶」であることを餘儀なくさせた、と堯佐は主張する。

許俊に對する意見は、もっと興味ぶかい。その評價のことば「許俊慕感激而不達者也」は、いく通りにも意味のとれる文であるが、吉川教授の急所を射ぬいた譯によれば、

許俊は、熱血を慕ひながらものわからぬものである。(「唐宋傳奇集」の譯文による)

もし蛇足を加えることを許されるならば、堯佐は、許俊の熱血のためには身の危険を忘れるほどの勇氣も、才智の裏づけに缺けていること

を悲しんでいるのである。堯佐が、「達人」つまり「賢人」の例としてあげた曹沫や藺相如は、すべて勇氣とそれに裏づける智力によって、敗戦者もしくは弱者の立場に立ちながら、武力におごる強者に、手きびしく抵抗し、敵の氣力を挫き、勝利をもたらした人材であった。司馬遷のいう、「その義あるいは成り、あるいは成らず。しかれども、その意を立つること較然、その志を欺かず、名の後世に垂るる」ものであり、また、「その智勇に處してこれを兼ねと謂ふべき」人たちであった。

堯佐の理想とする勇者は、智勇兼備の人でなければならなかった。感激のみ慕った許俊は、その半ばを缺くものである。詐術を使って柳氏を奪還する程度で、沙吒利に何の痛痒も與えることはできなかった。だから許俊の行動は、「變」——まともでない——なのである。

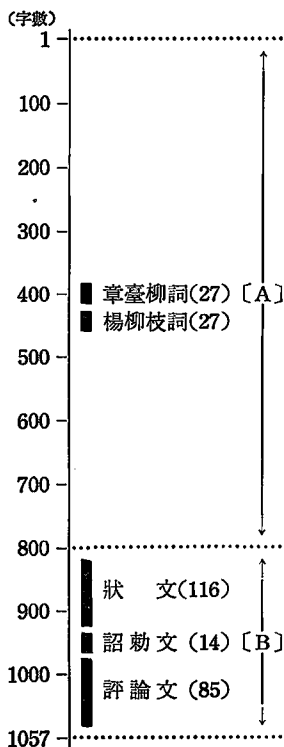
こういつた堯佐の二人に對する評價から、私は、堯佐の評論文の意圖を考えた。堯佐は、このエピソードを感動をもって誇らかに語り傳えたであらう多くの中國人とともに、許俊の義侠心に感動する一方、善良な中國人の生活をふみじつた異民族の、武力的優位に對して、反抗し抗議しようとしている。それは、安祿山の亂以來、異民族の武力を借りなければ、國內の治安を保持しえなくなっていた中國人の、武力へのコンプレックスの表現ではなからうか。そして、「兇恣に法を撓め、微かなる功に馮恃して、有志の妾を驅り、無爲の政を干す」凶暴無禮な彼らに、智勇兼備の中國人の英雄があらわれて、手きびしい抵抗が行なわれることを期待してはいないか。例えば「枕中記」の盧生は、夢の中で、河西道節度使となつて吐蕃を擊破し、斬首七千級、地を開くこと九百里という成果をあげることになっているが、それは開元という唐朝盛時の武力の象徴であつて、それが

貞元時代の著者沈既濟の、現實社會に寄せる夢でもあつたように。吐蕃や回紇の侵入に齒がみをした、大曆貞元のころの文人の、鬱屈した恥辱感が、ひいては、皇帝の優柔な態度への非難めいた表現となつて、このロマンスに露呈されていると私は考える。だから、堯佐は言う、許俊は眞の英雄としての資格に缺ける。けれども、それは彼の責任ではない。また柳氏が操を守ろうとしながらも、防ぎえなかつたのも、彼女の責任ではない。それは「境遇がそうさせる」のである。王朝の衰退による、屈辱的な戦後處理と、無能な皇帝を始めとする無力な政治擔當者がそうさせるのである、と。

(d) 文體について

「柳氏傳」は全文およそ一〇五七字の短編で、「枕中記」とほぼ近い長さをもつ作品である。

物語の中に二編の贈答の詩を交えるほか、狀文、詔勅文、それに物語の末尾に評論文を加える。このような複雑な成分をとりこんでいる小説は實ははなはだ少ない。また、それら叙事散文以外のジャンルの所在を圖示すると、左のようになる。



一見してわかるように、その構成は、八百字、つまり全體の八割あたりから變化が見られる。内容も、前半Aはやわらかく、後半Bは肩を張った堅い表現となる。また、叙事散文以外のジャンルの韻散文の占める比率は全體の二五・五%にも達し、その存在の意味の重大なことを示している。後半Bの堅い表現は、狀文で沙吒利の權勢に對する非難と、許後の行爲の稱揚を試み、詔勅文（といつてもごく短いのであるが）では、ことがらの結着を示し、評論文では人物論を述べて、前半Aのストーリーを結束する。

このように、浪漫的な前半を、合理的・論理的・道德的な後半の手續きによって完結に導くやりかたは、唐代小説の一つの形式をなしている。エピソードの記録者である作者は、同時に、人物とその事件に對する評價者であり、批判者であつて、自分のとりあげたことがらに對して、必ず判断を下さなければすまないものである。これは歴史家の役割りを、自からに背負つた小説作家のありようを示すものである。

例えば、貞潔な婦人が、自墮落な淫婦に轉落してゆく姿を冷酷に描いている「河間傳」において、作者柳宗元が「愛の不信」を描きつつ、ついには「君臣の不信」にまで論理を飛躍させているのも、彼が、民間の瑣事を、史傳の高さからすくいあげ、輕快な社會諷刺を試みようとしたことをあらわしていると言つていいだらう。身近におこつた感動的なエピソードは、それだけで十分に讀者の興味をそそるが、そのままでは、志怪、瑣話の域を出ない。そこで中唐の文人たちは、勇ましい跳躍を試みたのである。「柳氏傳」の作者が言うように、「變」——まともでない——ことがらをモチーフとして、そこに、「正」——まともな——ことを發見し、見失なわれている眞實性を指摘しようとするのである。それは司馬遷の「史記」における遊俠や刺

客の扱いかたと本質的には異なるものではないと思われる。「柳氏傳」のように、唐代小説の幾編かが、評論文を最後にもつのは以上のような理由からであらうと思う。

唐代小説の文體は簡潔であつて、四字句を壓倒的に多く使用する。ところで「柳氏傳」は「枕中記」や「補江總白猿傳」に比較すると、六字句の占める比率が多く、四字句と共に、對偶表現を整える場合が目立つ。「柳氏傳」は、駢文の狀文を含んでいるから特にその傾向はあるのだが、その他の叙事散文にもその傾向は明らかであつて、むしろ「古鏡記」の比率に類似している。

四　　む　　す　　び

許堯佐は、貧しい家庭から身を起して、官僚としても中級の上に位置する諫議大夫にまで立身した。彼は詩人としても文章家としてもその名を高めた人ではなかつた。彼が今日名のあるのは、當時決して一流の文章とは思つていなかったであらう「柳氏傳」のおかげである。

堯佐は、貧しく不遇な詩人韓翃の、情熱的なエピソードに感動し、かつ異民族の武力的優位に反抗する氣持を、彼の小説「柳氏傳」に描いた。貧しい家柄に育ち、地方藩鎮に職を求めて旅しなければならなかつた彼は、自分と同質なものを韓翃に感じ、その激しくも強い愛情に強く牽かれていたのであらう。「柳氏傳」にみられる情愛至上主義には、作者の年齢の若さが想像される。

韓翃と柳氏のエピソードは、晚唐孟榮の「本事詩」にひかれていることはすでに述べた。近藤春雄氏は「本事詩」は「柳氏傳」を見て綴つたものと考えられる方が確實性があると述べられる。また晚唐の詩人趙嘏の逸話にひかれる詩に「當時聞說沙吒利」の句があつて、「柳氏傳」

の筋らしいものがひかれていることを「唐撫言」卷一五は傳えている。さらに羅燁の「新編醉翁談錄」卷二に收める「韓翃柳氏遠離再會」の物語、南宋の皇都風月主人の「綠窗新話」卷上に收める「沙吒利奪韓翃妻」にもそれは及んでいる。その他「太和正音譜」「重訂曲海總目」「曲目新編」「遠山堂曲品」「今樂考證」には、「章臺柳」あるいは「練囊」といったこのエピソードを題材とする戯曲の名を留めている。

許堯佐の官僚としての業績は、歴史の體の方に消え失せてしまつたが、彼が激しい感動をこめて書いた小説「柳氏傳」は、永遠に變らない男女の愛情を描き、當時の中國人の社會意識人間觀を述べて、後世の人々に感銘を與へ續けたのであつた。

注(1) 李長之「中國文學史略稿」第三卷p 19、一九五五、五十年代出版社刊

(2) 文苑英華卷七二八

(8) 杜甫の「秋興八首」の「征西車馬羽書馳」の一句について、「杜詩鏡銓」「讀杜心解」の著者の解釋によると、「征西」とは、吐蕃の入寇をいう、とする。貞元中期以降、韋臯は、雲南を吐蕃の勢力下から唐朝にひきつけ、諸羌族を平定して、日々朝廷に進奉をたてまつっていた。「太平廣記」卷二七四には、韋臯と江夏の姜判寶の侍女玉簫との七年の長きにわたるロマンスが傳えられている。

(4) 「新唐書」卷一〇〇張宿傳。「唐會要」卷五五

(5) 「新唐書」卷一六三柳公綽傳

(6) 「新唐書」卷五七藝文志

(7) 「新唐書」卷一六一楊於陵傳、および「資治通鑑」卷二三七、二三八、「新唐書」卷六二宰相表により検討した。

(8) 「全唐詩」には韓翃の詞を「寄柳氏」と題し、柳氏の詞を「韓答翃」と題している。「全唐詩」によつた林大椿の「唐五代詞」は、それに「章

臺柳」「楊柳枝」の題をさらに付けている。今はこれに従つた。

(9) 段安節「樂府雜錄」歌の項に收める物語。大曆中、父と乞食をして歩いてきた張紅紅は、將軍韋青の目にとまつて、愛妾となり、古曲長命西河女を歌つた。やがて、帝に知られて宜春院に納れられ、才人になつた。ある日、韋青が死亡したことを傳へ聞いた紅紅は、一慟して絶息した、という。

(10) ○「昔日」、全唐詩、唐五代詞は「顔色」に作り、本事詩は「往日」に作る。○「青青」顧氏文房小説本、津逮秘書本本事詩には「依依」に作る。○「亦應」全唐詩、唐五代詞には「也應」に作り、新編醉翁談錄卷二韓翃柳氏遠離再會には「爭知」に作る。

(11) ○「所恨」、本事詩には「可恨」に作る。

(12) 胡震亨「唐音癸籤」卷七所收の文による。

(13) 「唐語林」卷二

(14) 「昌黎」を太平廣記は「昌黎」に作り、唐詩紀事、唐才子傳は「南陽」に作る。「韓翃」を太平廣記は「韓翃」に作り、本事詩、唐詩紀事、唐才子傳は「韓翃」に作る。

(15) 「太平廣記」は「落托」に作るが「落拓」の誤りであろう。

(16) 「太平廣記」は「李生」、「本事詩」は「李將」に作る。「新編醉翁談錄」では「富人李生」に作る。

(17) 元和十年沈亞之は涇原節度使李勣の幕下にあつて「異夢錄」を書いてゐる。拙稿「沈亞之と小説」中國文學報12參照。

(18) 「唐才子傳」は「楊紘」に作る。

(19) 平岡武夫氏「唐代の長安と洛陽」には、「法靈寺」の名を載せない。おそらく宣平坊にあつた「法雲尼寺」の誤りであろう。「新編醉翁談錄」には、「法雲寺」に作つてゐる。

(20) 林謙三著郭沫若譯「隋唐燕樂調研究」p 42によると、唐代の音樂「沙陀力」は Sattaria の音譯で、そのつまつたのが「沙陀」「娑陀」であ

ると述べられている。物語の沙吒利は音楽とは関係はないが、發音の類似から、沙吒利は沙陀のなまったものであると思われる。「新唐書」卷二二八沙陀傳によると、天寶初年回紇は唐朝に内附したので、その屬國沙陀の酋長骨咄支は回紇副都護となり、肅宗に従って安祿山を討ち、特進驍衛將軍に拜せられた。その子靈忠は金吾將軍酒泉縣公に拜せられたが、貞元中、沙陀族七千帳を率いて吐蕃に付き、甘州(甘肅省張掖縣)に移った。そして、吐蕃の侵攻のさいは、常に先鋒となった。のち元和中、酋長朱邪執宜は唐朝に付いた。このように、回紇・吐蕃・唐の間には生まれた戦闘民族であったのである。

㉑ 「新唐書」卷一四一侯希逸傳

子城とは本城の出丸、また、小城の外廓、また、官廳街をいう。この場合、どこを指すのか明らかでないが、皇城の離宮として、玄宗の造營した興慶宮は、夾道を通じた壮大な宮殿であった。もし、それを指すとするれば、その南は道政坊で、六坡の一つのうねりがそこに達していて、「柳氏傳」の再會の場所と重なることになる。

㉒ 「史記」卷八二刺客列傳

㉓ 「史記」卷八一廉頗藺相如列傳

㉔ 拙稿「沈既濟と小説」東方學32集參照。
主なる作品について参考として擧げる。

小説名	詩	その他の散文	論贊	備考
枕中記		疏・詔	論	貞元初年作
任氏傳			論	建中二年作
柳氏傳	贈答詩2	狀・詔	論	
李章武傳	贈答詩・その他8			貞元十一年以降作

許堯佐とその小説

作品名	二句の字數	3	4	5	6	7	備考
柳毅傳	2						
南柯太守傳							貞元十八年作
謝少娥傳							元和十三年以降作
李娃傳							
三夢記	2						
鶯鶯傳	5						
周秦行紀	7						
異夢錄	2						元和十年作
湘中怨解	3						元和十三年作
秦夢記	3	墓誌銘					太和初年作
劉無双傳		書					

㉕ 他の小説や「柳氏傳」の一句の字數を、魯迅・汪璧疆の句讀によって分類してみた。句讀の切りかたは讀者の好みにも左右されるだろうし、テキストによっても差が生ずるので、正確は期しえないが、一應の傾向を知るために表示する。但し一字および八字以上の句は略す。

作品名	二句の字數	3	4	5	6	7	備考
柳氏傳	全體比 回數	四・六 九	八・〇 一六	二・九 三三	二・九 三三	四・六 九	
枕中記	全體比 回數	二・三 三	六・一 一六	一・七 三	六・一 三	二・六 七	

